エンカウンター・グループの効果性に関する研究

——Q技法による経験内容の検討(I)——

畠　瀬　直　子

序

エンカウンター・グループが，日本で臨床心理学の一技法として知られる様になったのは最近であり，研究は緒についたばかりである。

アメリカでは過去25年間，人間関係改善の技法としてグループ利用が活発に行なわれてきた。日本でもよく知られているのは，ラボラトリー・トレーニング，感受性訓練，Tグループ等である。その目的は，集団経験を通じて自己の行動の欠点に気付き，自発的に感じ方，態度，古い価値観を変革させより有能な人間として機能していく事である。エンカウンター・グループは，このグループ利用の動きとは別個に，十数年後に，ロジャース派の心理治療家が自己研修のワークショップでグループを利用する中から生れてきた。訓練が目的ではなく，各個人の成長を通じて fully functioning が追求される。

エンカウンター・グループの参加経験によって何が得られ，どの様に生かされるかは，従来の個人面接法と同様に各個人に帰せられ，グループを主宰する側の目的は open-ended である。しかしながら，参加する側での目的は明確になって来たと云う(Fadiman, F. 1970)。それは，(1)自己に対しても，他に対しても卒直に，感情を偽らずに行動する。(2)これを妨害する問題点を自己の中に発見し，認める。(3)その問題点を表明し克服する為に，グループの力，グループからのサーポートを，リーダーと共に，ある場合にはリーダーなしに利用する。(4)緊迫しているが安全な状況の中で，深い次元の親密さ，思いやり，愛を経験する等である。Rogers, C. (1970), O'connell (1970) は，エンカウンター・グループの動きを克明に記述して，そういった参加目的が達成されていく過程を明らかにしている。

アメリカでは，エンカウンター・グループの有効性が，その危険性を踏まえながら[1]広く認めら

1) Lieberman, M. A., Yalom, I. D., Miles, M. は，アメリカ精神医学会 (American Psychiatric Association) 大会で，各種のエンカウンター・グループに於る失敗率について報告している。これは，Rogers による狭義のエンカウンター・グループに限定されず，麻薬常用者更正の為のグループ，Synanon, 等をも含めたグループ一般に関する調査である。それによると，グループ参加者の10％に好ましくない結果が見られるという。特に，攻撃的リーダー (aggressive stimulator) の行うグループでの危険率が高いのが特徴だと報告している。〔Psychology Today, 6月号, 1971〕

れている。日本では，畠瀬稔の調査（畠瀬，1971）によると，有効性に対する全般的評価は肯定的であるという。

本研究は，エンカウンター・グループの一般的有効性の認識に基いて，その経験内容を詳細に吟味し経験特性を明確にし，克服されるべき問題点を掘り起こして，今後の発展に資そうとするものである。

方法としては，Qカード分類法を採用した。Q技法は，Stephenson, W.（1953）によって考案されたもので，心理学に於る主観的資料を素材にした研究に道を開いたものとして知られている。本研究でQ技法を使用したゆえんはこの事にある。

分類基準として，個人が現実に自分の経験として捉えている（現実分類），グループ・メンバーには自分の経験がどう見られているかという予測（予測分類），希望する経験（希望分類）の3種を設定した。深い次元の出合い経験に成長発展の基本を求めるエンカウンター・グループではこの3基準の一致やずれ等が経験内容追求の良い手掛りになると考えたからである。

方　法

1.　Q分類カード

Qカード作製は，基本となる理論枠の設定から始まる。本研究では，Cartwright, R. D.（1968）による，全ての心理治療に共通な基本的治療関係要因を参考にした。彼は4つの基準を考えている。(1)治療者，患者の間に暖かさ，尊重，受容が必要である。(2)治療に対する動機づけ，(3)治療者が患者を十分に理解すること。(4)相手の動きに対する知覚。期待していた動きを相手の中に認める程効果が大きい。以上4項目から3つを選び，エンカウンター・グループの特性に合う様な理論基準を設定した。

感受性の基準……ある発言に見られる affectional attitude が，肯定的(a)，否定的(b)，中立的(c)

動機づけの基準……発言の動機づけが，消極的で浅い involvement と認められるもの(d)，積極的で深い involvement と認められるもの(e)

理解の基準……発言に現われた理解の側面が，知的理解，割り切りに基くもの(f)，個人の内的，情緒的洞察を伴った理解に基くもの（g）

あるエンカウンター・グループの録音記録28時間分の，単一の発言として取り出して使えるもの数百の内から，上に述べた基準の組み合せ12カテゴリーに合うものを8箇ずつ選んだ96発言が使用された。

12カテゴリーは次のものである。

(1)　adf……肯定的態度，消極的動機づけ，知的理解

(2)　adg……肯定的態度，消極的動機づけ，情緒的洞察を伴った理解

(3)　aef……肯定的態度，積極的動機づけ，知的理解

(4)　aeg……肯定的態度，積極的動機づけ，情緒的洞察を伴った理解

(5)　bdf……否定的態度，消極的動機づけ，知的理解

(6) bdg……否定的態度，消極的動機づけ，情緒的洞察を伴った理解

(7) bef……否定的態度，積極的動機づけ，知的理解

(8) beg……否定的態度，積極的動機づけ，情緒的洞察を伴った理解

(9) cdf……中立的態度，消極的動機づけ，知的理解

(10) cdg……中立的態度，消極的動機づけ，情緒的洞察を伴った理解

(11) cef……中立的態度，積極的動機づけ，知的理解

(12) ceg……中立的態度，積極的動機づけ，情緒的洞察を伴った理解

2. 調査方法

期日，対象グループ：1971年8月，人間関係研究会主催によるエンカウンター・グループ研修会に於て，あるグループで実施，メンバーは13名。〔教師(4)，企業内訓練担当者(3)，学生(3)，カウンセラー(3)，看護婦(1)〕1日目の終り，グループ終了時（6日目）の2回実施。最終日の結果は，後日郵送にて回収。

手続：無記名　ただし，山，川等の文字を利用して，同一人確認の工夫をした。分類は強制分類法で準正規分布を形成する，9段階に分類させた。

指示は次の通りである。

1. ここに，96枚のカードがあります。その一枚一枚には，エンカウンター・グループの中で見られたいろいろな短い発言が書きとめられています。このカードに記された発言を，あなたの経験に一番よく合うものから，一番合わないものまで，9段階に分類していただくのが，本調査の仕事です。

2. 分類は3回繰り返していただきます。1回目は，現在のあなたの経験からみて，一番合うものから，一番合わないものまでを9段階に分類する。（現実分類）

   2回目は，他の人があなたの経験を見て分類するならば，このように分類するだろうという点から考えて分類をする。つまり，他の人があなたの経験に一番合うと考えると思われるものから，他の人があなたの経験には一番合わないだろうと考えると思われるものまでを9段階に分類する。（予測分類）

   3回目は，あなたが自分の経験がこういうものであってほしいと希望する点から考えた時，あなたの希望する経験に一番合うものらか，一番合わないものまで，9段階に分類する。（希望分類）

3. それでは，現実分類から始めていただきます。

   ① まず96枚全部に目を通して下さい。

   ② 次に96枚を，自分に一番合う，だいたい合う，合わないという3つの山に分けて下さい。

   ③ それでは，この3つの山を利用しながら，一番合うものから，一番合わないものまで，9段階の分類をして下さい。（以下省略）

結果と考察

1. 現実分類に見られる全体的特長

Fig. 1に，カゴテリーの平均得点が示されている。これは回答者8名の平均である。本調査は96枚のカードを3回分類する労力のいるものであった為か，回収率は61.5％と低かった。

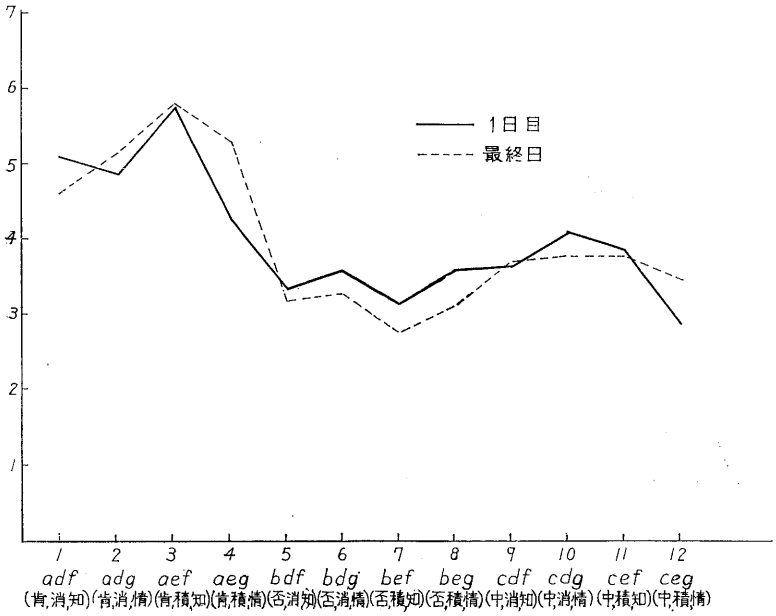

Fig. 1. エンカウンター・グループに於る経験特性 ——第一日目と最終日の比較——

(1) 1日目の結果

①得点分布：肯定的態度からの発言群は，否定的，中立的態度からの発言群より，平均得点が高い。即ち，肯定的態度を経験する方が，他の2種を経験するより多くなっている。

②経験に一番近いと評定されたカテゴリー：「他の人が自分をさらけ出さなくても，自分だけは出していこうと思っている。」，「自分は弱い面を今ここで出したいと思います。その事で傷つくかも知れませんが，それも発達過程として必要だと考えます。」等，肯定的，積極的，知的カテゴリー（aef）が一番高い評定を受けている。これは，グループ経験を生かそうとする意欲，積極性の高さを示すものである。

③経験に一番遠いカテゴリー：得点が一番低いのは，「このグループに参加している内に，何か頭が混線してきた。」，「私がこれまで出してきた事，私自身はとても重要だと思っていた。しかし他の人はそうは思っていなかった事を知って，自分と他の人との差を感じる。」等，中立的，積極的，情緒的カテゴリー（ceg）である。中立的態度，積極的動機づけという結びつきにくい組合せを含むこの発言群は，混乱，葛藤等を反映している。また，何かの問題に直面している事を表わしている。この経験が，1日目では一番感じられないのである。

④動機づけの特長：積極的動機づけ，消極的動機づけに分けて比較すると，肯定的態度群，否定的態度群には差がない。中立的態度群で消極的動機づけがやや高い（3.86. 3.36）。

⑤理解の基準の特長：知的理解，情緒的洞察を伴った理解に分けて比較すると，肯定的態度群では知的理解の方が高い（5.41，4.58）。否定的態度群，中立的態度群では殆んど差がない。

(2) 最終日の結果，第1日目との比較

①得点分布：肯定的態度を示す発言群が高得点，否定的態度を示す発言群は低得点，中立的態度を示す発言群は中間得点という3群に分れている。1日目と比較すると，否定的態度が一様に低くなり，肯定的態度が高くなっている。

②一番大きく変化したカテゴリー：「もう自分の裏を見せてしまったという気がする。その事が何かしら快い余韻を残している。」，「グループの中で自分自身に対して非常に敏感になりながら話せた事がすごく大きい意味がある。」等，肯定的，積極的，情緒的発言群（aeg）が大きい得点増加を示す。エンカウンター・グループでは，肯定的，暖い態度を経験しながら積極的に参加し，情緒的洞察を伴う理解を体験する事が重要視される。そこで，この結果は，ポジティブなグループ効果を示唆していると云えよう。

③一番経験に近いカテゴリー：肯定的，積極的，知的発言（aef）が1日目同様一番高い。グループ経験を生かそうとする意欲，積極性は一貫して高く経験されている。

④一番経験に遠いカテゴリー：「みんなが自分をさらけ出してないから，何を云っても無駄だと思う。」，「みんながEさんを傷つけて，その事がはっきりした時点でみんながあわて出すのを見て，そらみろと思った。」等，自己防衛的攻撃を反映する，否定的，積極的，知的発言（bef）が一番低くなっている。

⑤葛藤，混乱経験の増加：1日目に一番低かった，葛藤，混乱，問題との直面を示すカテゴリー（ceg）に増加が見られる。この結果は，グループの進行の中で各個人が問題を見つめて行き，最終日の段階に於ても未解決な気持がしている事を示唆するものと云えよう。

⑥動機づけの変化：1日目では，中立的態度群で消極的動機づけがやゝ高くなっていた他は，差がなかった。最終日では，肯定的態度―積極的動機づけ，否定的態度―消極的動機づけという結びつきに増加が認められる。

⑦理解基準の変化：1日目と較べると，全般的に，情緒的洞察を伴う理解に得点増加傾向が認められる。

2. 個人の経験の検討

グループ経験は，平均的変化では捉え得ない個人毎の特徴を持つ。限られた紙面ではあるが，個人の経験特性を見て行きたい。ここでは，混乱，葛藤，問題との直面を示すカテゴリー（ceg）が最終日に大きく増加しているA，現実，予測，希望間のずれが最終日に増加しているB，を取り上げる。グループ経験の効果性に疑問を感じさせられる様な結果を示す彼等の経験を検討する為である。

A

(1) 1日目，最終日の比較（表1）

①現実分類に見るAの特徴：[a]得点分布は両日を通じて肯定的発言群が高く，否定的発言群が低く，中立的発言群が中間になっている。[b]グループ経験を生かそうとする意欲，積極性を示すカテゴリー（aef）が非常に高い。[c]経験に一番遠いカテゴリーは，両日共，「何か雑談に近い様

表 1. 1日目，最終日の得点平均の比較(A)

		現実分類			予測分類			希望分類		
		1日目	最終日		1日目	最終日		1日目	最終日	
1	adf （肯，消，知）	4.50	4.00		4.63	4.13		4.13	4.13	
2	adg （肯，消，情）	4.25	4.13		3.63	3.75		3.75	4.13	
3	aef （肯，積，知）	6.25	6.63		6.00	6.88		6.48	6.63	
4	aeg （肯，積，情）	4.13	5.38	+	4.00	5.13		4.63	5.63	
5	bdf （否，消，知）	2.63	2.88		3.13	2.25		2.75	2.63	
6	bdg （否，消，情）	3.00	3.00		3.25	2.88		2.50	2.25	
7	bef （否，積，知）	2.88	3.00		2.88	3.25		3.13	3.38	
8	beg （否，積，情）	4.25	4.00		4.00	4.13		4.13	3.88	
9	cdf （中，消，知）	4.00	3.38		4.25	3.25	+	4.00	3.50	
10	cdg （中，消，情）	3.75	3.00		4.00	3.25		4.13	2.88	
11	cef （中，積，知）	4.50	3.88		4.63	3.88		4.63	4.13	
12	ceg （中，積，情）	4.13	4.75		3.50	5.25	***	3.88	4.88	*

$p<0.10+$，$P<0.05*$，$P<0.002***$

な事ばかり話している。」，「私は，相手の気持が分っただけでは何の足しにもならない様に思う。」等，グループ過程の傍観者的批判を示す，否定的，消極的，知的発言群（bdf）である。[d]「どうしてこう素直に行動に移す事が恥ずかしくてちゅう躇することなんだろうかと思います。」，「私自身の問題をグループに投げかけて深めたいという気持があるんですが，話し合わないまゝに過ぎています。」等，充実した経験の要求を反映する，中立的，消極的，情緒的発言群（cdg）が最終日に大きく減少している。これは，グループの中で充実感を得て行った事を示すものだろう。[e]エンカウンター・グループで重視される，肯定的，積極的，情緒的発言（aeg）を自分の経験として感じる度合は最終日に高くなっている。[f]一方では，葛藤，問題との直面を示すカテゴリー（ceG）が1日目に平均より高く，最終日ではさらに高くなっている。これは，意欲が高く，傍観者的態度を取らないAが，多くの葛藤，問題に直面した事，また未解決の感じが強い事を示す。

②希望分類の特長：[a]得点分布，変化は現実分類とほゞ等しい。即ち，Aのグループ経験は，大体希望の線に沿っているのである。[b]一番希望しない経験は，「私は，話しかけてもらっても正直に入っていけないものを感じている。」，「現在進んでいる話し合いは，自分の思ってきた事とはだいぶずれてきたなという気がします。」等，消極的傍観を示す，否定的，消極的，情緒的発言群（bdg）である。[c]注目してきた，葛藤，問題との直面を示すカテゴリーが有意に高くなっている。この変化は，Aに於るトレランスの増加，又は，意欲的に取り組むのを特長とするAの，違った形の取り組み方を示すものと見る事ができる。そこで，現実経験に於るこのカテゴリーの増加が，経験全体にとって必ずしもマイナスに作用しているとは云えないのである。

(2) 現実分類，予測分類，希望分類間の差（表2，表3）

①現実分類—予測分類：グループ・プロセスの傍観者的批判を示すカテゴリー（bdf）は，1日目では予測分類の方が高く，最終日では逆に低くなっている。このカテゴリーに関しては，

表 2. 現実分類，予測分類，希望分類間の差（A，1日目）

		現実	予測		予測	希望		現実	希望	
1	daf （肯，消，知）	4.50	4.63		4.63	4.13		4.50	4.13	
2	adg （肯，消，情）	4.25	3.63		3.63	3.75		4.25	3.75	*
3	aef （肯，積，知）	6.25	6.00		6.00	6.48		6.25	6.48	
4	aeg （肯，積，情）	4.13	4.00		4.00	4.63	*	4.13	4.63	
5	bdf （否，消，知）	2.63	3.13	*	3.13	2.75	+	2.63	2.75	
6	bdg （否，消，情）	3.00	3.25		3.25	2.50	+	3.00	2.50	***
7	bef （否，積，知）	2.88	2.88		2.88	3.13		2.88	3.13	
8	beg （否，積，情）	4.25	4.00		4.00	4.13		4.25	4.13	
9	cdf （中，消，知）	4.00	4.25		4.25	4.00		4.00	4.00	
10	cdg （中，消，情）	3.75	4.00		4.00	4.13		3.75	4.13	
11	cef （中，積，知）	4.50	4.63		4.63	4.63		4.50	4.63	
12	ceg （中，積，情）	4.13	3.50		3.50	3.88		4.13	3.88	

P<0.10+，P<0.05*，P<0.002***

表 3. 現実分類，予測分類，希望分類間の差（A，最終日）

		現実	予測		予測	希望		現実	希望	
1	daf （肯，消，知）	4.00	4.13		4.13	4.13		4.00	4.13	
2	adg （肯，消，情）	4.13	3.75		3.75	4.13		4.13	4.13	
3	aef （肯，積，知）	6.63	6.88		6.88	6.63		6.63	6.63	
4	aeg （肯，積，情）	5.38	5.13		5.13	5.63		5.38	5.63	
5	bdf （否，消，知）	2.88	2.25	*	2.25	2.63		2.88	2.63	
6	bdg （否，消，情）	3.00	2.88		2.88	2.25		3.00	2.25	
7	bef （否，積，知）	3.00	3.25		3.25	3.38		3.00	3.38	+
8	beg （否，積，情）	4.00	4.13		4.13	3.88		4.00	3.88	
9	cdf （中，消，知）	3.38	3.25		3.25	3.50		3.38	3.50	
10	cdg （中，消，情）	3.00	3.25		3.88	2.88		3.00	2.88	
11	cef （中，積，知）	3.88	3.88		5.25	4.13		3.88	4.13	
12	ceg （中，積，情）	4.75	5.25		4.13	4.88		4.75	4.88	

P<0.10+，P<0.05*

メンバーは，自分の真実の経験を見ていないという予測が示されている。

②予測分類—希望分類：エンカウンター・グループで重視される，肯定的，積極的，情緒的発言群（aeg）は，1日目に於て，希望分類の方が高い。最終日には，有意差は見られない。

③現実分類—希望分類：[a]「いろいろな人の発言を聞いていて，人間には今まで考えていた以上に深い面があるという事が分った。」等，肯定的傍観を示すカテゴリー（adg）は，1日目に於て，現実分類の方が高い。最終日には差は見られない。[b]消極的傍観を示すカテゴリー（bdg）は，1日目に於て，現実分類の方が高くなっている。最終日では，差がない。

④分類間に見られる差の全体傾向：現実の自分の経験に照した評定，メンバーの目に映っている自分の経験の予測，希望する経験から見た評定，それぞれの間に食い違いがない時，その経験は一致統合したものと云える。1日目では分類間の差が4つのカテゴリーに見られるが，最終日で

は1カテゴリーのみである。従って，Aに於ては，経験は一致の方向に動いたと云える。

B

(1)　1日目，最終日の比較（表4）

①現実分類に見られるBの特徴：[a]グループ全体の平均的動きと異って，最終日に肯定的発言群の得点平均が減少し，中立的発言群では増加している。[b]「私は，きっちりした自分の枠を守

表 4.　1日目，最終日の得点平均の比較(B)

		現実分類			予測分類			希望分類		
		1日目	最終日		1日目	最終日		1日目	最終日	
1	adf　(肯，消，知)	4.75	3.50		5.38	4.00	**	4.88	4.38	
2	adg　(肯，消，情)	.5.8	5.25		6.13	5.75	**	5.88	5.38	
3	aef　(肯，積，知)	6.00	5.63		6.25	4.50		5.75	6.00	
4	aeg　(肯，積，情)	5.13	5.38		4.63	5.13		5.13	5.13	
5	bdf　(否，消，知)	3.13	3.13		2.75	2.63		3.13	2.13	***
6	bdg　(否，消，情)	3.25	2.50	+	3.38	3.25		2.63	3.63	
7	bef　(否，積，知)	2.88	2.50		2.75	2.00	**	2.88	1.88	
8	beg　(否，積，情)	2.50	3.13		2.88	3.00		2.75	2.50	
9	cdf　(中，消，知)	3.50	3.50		4.13	3.38		3.88	2.63	
10	cdg　(中，消，情)	3.50	4.00		3.75	4.88	***	3.38	5.13	+
11	cef　(中，積，知)	3.50	5.25	*	3.63	4.50		4.63	4.75	+
12	ceg　(中，積，情)	3.75	4.25		3.38	4.00		4.38	4.50	

P<0.10+，P<0.02**，P<0.01***，P<0.005****

って，いわゆるハプニングが起らない関係の中で動いている。これはこれで，ひとつの在り方としていいと考えている。」，「本人がそっとしてほしいと云う時には，そうしてあげるのが原則だと思います。」等，枠組遵守の態度を反映するカテゴリー（adf）が最終日に低くなっている。[c]エンカウンター・グループで重視される肯定的，積極的，情緒的発言（aeg）を最初から自分の経験に近いものと感じている。[d]自分の経験と一番違うと感じるカテゴリーが，第1日目と最終日では異っている。[e]傍観者的批判を示すカテゴリー（bdg）が低くなる一方，「私はグループの話題の中心になって熱心に参加してきたが，振り返ってみると出したくないものを無理に引き出されたように感じている。」等，積極的参加の中での疑問（beg）が高くなっている。得点としては低いが，この変化は，グループに深く係ってきたBに一部で疑問が生じてきている事を示すものと云えよう。[f]「純粋に生きようとしたって現実にはそうできない面があるんじゃないだろうか。それを素直に認めた方がいいんじゃないだろうか。」，「私は，自分が弱い，主張のない人間である事を知っている。もちろんこの事はいつも陰している。ところが周囲からは逆にとられてしまう。」等，中立的，積極的，知的発言群（cef）が最終日に有意に高くなっている。この変化には，Bが価値観の動揺，迷い，安定しない感じを経験するようになった事が示されている。

②予測分類：他人の見る自分の経験の予測は，かなり変化してきている。

③希望分類の特長：ⓐ最終日に，グループ過程の傍観者的批判を示す発言群（bdf），自己防衛的攻撃を反映する発言群（bef）を希望しない経験と感じる度合がより高くなっている。ⓑ充実した経験の要求を反映する発言群（cdg），価値観の動揺等を暗示する発言群（cef）は，最終日に，希望する経験に近くなっている。〝最終日に，充実した経験の要求，価値観の動揺等が高くなっている〟という一般的には好ましくないと見られる結果を希望するものと感じる度合が高くなっているのである。ⓒ希望分類全体では，正負両方向の動きが多く見られる。これは，グループ経験によって，希望する経験が変わってきた事を示している。

(2) 現実分類，予測分類，希望分類間の差（表5，表6）

表 5. 現実分類，予測差分類，希望分間の類（B，1日目）

		現実	予測		予測	希望		現実	希望	
1	adf （肯，消，知）	4.75	5.38		5.38	4.88		4.75	4.88	
2	adg （肯，消，情）	5.88	6.13		6.13	5.88		5.88	5.88	
3	aef （肯，積，知）	6.00	6.25		6.25	5.75		6.00	5.75	
4	aeg （肯，積，情）	5.13	4.63	*	4.63	5.13		5.13	5.13	
5	bdf （否，消，知）	3.13	2.75		2.75	3.13		3.13	3.13	
6	bdg （否，消，情）	3.25	3.38		3.38	3.13		3.25	3.13	
7	bef （否，積，知）	2.88	2.75		2.75	2.63		2.88	2.63	
8	beg （否，積，情）	2.50	2.88		2.88	2.88		2.50	2.88	
9	cdf （中，消，知）	3.50	3.13		3.13	2.75		3.50	2.75	
10	cdg （中，消，情）	3.50	3.75		3.75	3.88		3.50	3.88	
11	cef （中，積，知）	3.50	3.63		3.63	3.38		3.50	3.38	
12	ceg （中，積，情）	3.75	3.38		3.38	4.63		3.75	4.63	

P<0.10+，P<0.05*

表 6. 現実分類，予測分類，希望分類間の差（B，最終日）

		現実	予測		予測	希望		現実	希望	
1	adf （肯，消，知）	3.50	4.00		4.00	4.38		3.50	4.38	
2	adg （肯，消，情）	5.25	5.75		5.75	5.38	+	5.25	5.38	
3	aef （肯，積，知）	5.63	4.50		4.50	6.49		5.63	6.00	
4	aeg （肯，積，情）	5.38	5.13	*	5.13	5.13		5.38	5.13	
5	bef （否，消，知）	3.13	2.63		2.63	2.13	*	3.13	2.13	+
6	bdg （否，消，情）	2.50	3.25		3.25	3.63		2.50	3.63	
7	bef （否，積，知）	2.50	2.00		2.00	1.88		2.50	1.88	+
8	bdg （否，積，情）	3.13	3.00		3.00	2.50		3.13	2.50	
9	cdf （中，消，知）	3.50	3.38		3.38	2.63		3.50	2.63	
10	cdg （中，消，情）	4.00	4.88		4.88	5.13		4.00	5.13	*
11	cef （中，積，知）	5.25	4.50		4.50	4.75		5.25	4.75	+
12	ceg （中，積，情）	4.25	4.00		4.00	4.50		4.25	4.50	

P<0.10+，P<0.05*

①現実分類―予測分類：ⓐ1日目に，エンカウンター・グループで重視される，肯定的，積極

的，情緒的発言群（aeg）を，他のメンバーは自分が実際に感じているよりも低く見るだろうと予測している。[b]最終日に，充実した経験の要求を暗示するカテゴリー（cdg）を，メンバーは自分が感じるよりも高く評定するだろうと予測している。

②現実分類—希望分類：[a]現実—希望の差が最終日に多くなっているのがBの特長である。[b]希望以上に現実で高く経験されているカテゴリーは，傍観者的批判を示す発言群（bdf），自己防衛的攻撃を反映する発言群（bef），価値観の動揺等を暗示する発言群（cef）である。[c]現実経験が希望より低くなっているのは，充実した経験の要求を反映する発言群（cdg）である。

結　　び

本研究では，Q技法を用いてエンカウンター・グループの経験内容を検討してきた。Q分類カードで使用した発言群は実際にグループの中で見られた発言に限定し，各カテゴリーに合った典型的発言を創作する様な事はしていない。そこで，研究を始める段階では，カテゴリーの特性が結果に生かされてくるかどうか若干の危惧を感じていた。しかしながら，本研究の結果は，この分類カードが十分使えるものである事を示している。筆者は，これを用いて経験のかなり深い次元を探る事ができると考えている。

結果と考察に於て，グループの経験内容がかなり明確にされた。しかし，この結果はひとつのグループに関するものだから，今後研究の積み重ねによって，グループ間の共通性や差を明確にする必要がある。また，調査の回収率を100％にして，メンバー間の共通性や差もさらにはっきりさせねばならない。

グループ終了時に，葛藤が1日目より高かったり，現実—希望の食い違いが多かったりする個人の経験を検討した結果，それらの経験が個人にマイナスの作用をしているとばかりは云えない結果が示されている。この事実は，経験の複雑さ，個人の可能性の探さを示唆している。Maslow, Aは，心理学的にマイナスの作用を持つと見られる種々の問題を取りのぞく治療のあり方に対して，問題をそのまゝにして克服していく治療のあり方を主張し，個人はその方法によって成長するだけの力を内包していると云う。この問題については，今後の研究の中で取り組んで行きたい。

エンカウンター・グループという臨床技法に関心を持つひとりの臨床家としてこの結果を見る時，今後の実践の中で考えていかねばならない多くの問題に気付かせられている。

参 考 文 献

Cartwright, R. D. Psychotherapeutic Processes. *Annual Review of. Psychology* 1968, **19**, 387—412

Dyer, W. G. Congruence and Control. *The Journal af Applied Behavioral Sciences*, 1961, **5**, 161—173

Fadiman, F. Reviews. *Journal of Humanistic Psychology*, 1970, **10**, 178—180

Gendlin, E. T. A Theory of Personality Change. In Hart, J. T. &Tomlinson, T. M. (ed.) *New Direction in Client-Centered Therapy*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1970, 129—189

畠瀬稔　エンカウンター・グループに関する研究（1.）—参加者経験の考察—　日本心理学会第35回大会（1971）発表

Maslow, A. H. Toward a Psychology of Being. New York: Van Nostrand, 1962,

O′ Banion, T. & O′ Connell, A. The Shared Journey: An Introduction to Encounter. New York: Prentice-Hall, 1970.

ロジャース，C.（友田不二男編訳）成功・失敗事例の研究—サイコセラピイへの科学的アプローチ—ロジャース全集第10巻）岩崎学術出版社

Rogers, C. R. On Becomming a Person. Boston: Houghton Mifflin Company, 1961

Rogers, C. R. Carl Rogers on Encounter Groups. New York: Harper & Row, 1970.

Stephenson, W. The Study of Behavior —Q-Technique and Its Methodology—.Chicago: The University of Chicago Press, 1953